

日本の大理石石材産業と歴史的建造物について

Building stone marbles in Japan: the historic buildings in Japan and the marble localities

乾 睦子 [1]

Mutsuko Inui[1]

[1] 国土大・理工

[1] Science and Engineering, Kokushikan Univ.

<http://www.eg.kokushikan.ac.jp/eng/inui/>

日本列島には多種多様な石材が産出する。その多くは石碑や庭石、墓石などに利用されており一般にも馴染み深い。建築石材としての大理石も全国で採掘されていたことは、今では知る人が少ない。とくに昭和初期の歴史的建造物には、国産大理石が使用された例も多いと思われるが、石材の産地に関する記録資料は少なく情報が失われつつあることが次第に明らかになっている。日本産の大理石を記録にとどめることは、国土や地域風土に関する知識の継承という意味で重要であるのみならず、歴史的建造物のどの部分にどの石材が使われていたかという、補修修繕にあたって必要不可欠な記録にもなる。適用されている石材の貴重さが、その建造物に新たな文化財的価値をもたらすこともあり得る。このような観点から、国産大理石産出の歴史について、主な大理石産地と、歴史的建造物との両面から調査を進めている。

国産大理石産業の歴史

日本に石材採掘・加工に関する西洋の技術が導入されたのが1900年前後とされている（全国石材工業会、1965）。山口県や岐阜県、茨城県などの大規模な大理石産地の石材が、徐々に洋館の内装に利用されるようになっていったが、全国的に大理石産業が隆盛する契機になったと言われるのは、国会議事堂（1936年竣工）の建設である。議事堂には国産石材のみを使用するという方針が採られたため、全国的に大理石資源が探索されることになったからである。その後第二次世界大戦を挟み、国内の大理石産地は、置き時計や配電盤などの産業にも活路を見出し、さらに新しい採掘場が開発された時期もあった。少なくとも1970年代までは国産の大理石石材はそれほど希少なものではなかった（1976年の石材カタログ（矢橋大理石商店、1976）に山口県・高知県などの大理石が記載されている）。ただ、全国的に流通していたのは山口県などの大規模産地の大理石に限られたらしく、基本的には各地域で地元の石材が利用される形で展開されていた。1980年代頃から安価な輸入石材が大量に入手できるようになると、国内産大理石の品質維持の困難さ（資源量枯渇）や人件費の高騰などのため、流通量は急速に縮小した。現在では、歴史的意義のある建造物の補修時など、よほどこだわりをもって国産石材を指定しない限り入手する機会はほとんどないと言ってよいほどになっている。各産地および石材業者で営業を続けているのは、素材を輸入石材に切り替えて加工・施工を行っているケースが多い。しかし、昨今の地域重視の観点から、地域の石材に関する情報を再発掘し、記録・発信したいという要望が産地の側からも聞かれた。ただし当時を記憶する関係者の数が少なく情報再収集は困難である。

国産大理石が用いられた建築物の記録

産地での情報収集と並行して、国産大理石が用いられていると推定される建造物の調査をいくつか行い、石材の情報がどの程度入手できるのかを調べた。たとえば、東京都庭園美術館（1933竣工）は建築物として解説書も発行されているが、内装に用いられた様々な大理石の産地はほとんど記載されていない。新築時の仕様書「朝香宮邸新築工事録」にも「外国産」「国産」という記載しか見られなかった。大部分は海外からの輸入石材が指定されており、イタリアなどの著名な大理石と思われるものが多かったが、国産大理石と推定される一部の箇所を調査した結果、山口県産と推定される石材など国産大理石がいくつかあることが分かった。国立科学博物館本館（現日本館、1931竣工）についても、当初の記録は残っておらず、近年の改修工事を機にあらためて石材調査が行われて産地が推定された（国立科学博物館、2007）。その結果、イタリアからの輸入石材と国産石材（岐阜県産大理石と埼玉県産蛇紋岩）とが用いられたと考えられている。

まとめ

1930年代前後に建設された歴史的建築物には、国産大理石が用いられている可能性が高いことが分かったが、同時に、それらの大理石の出自は一般に記録に残されることがなく、あらためて調査をする必要があることが分かった。産地側でも記録はほとんど残っておらず産地特定は容易ではないが、地域の石材の記憶を保存したいという要望は産地側からも聞かれた。どの地域の岩石がどの建築物に使われているか、という情報は、産地にとっても建築物にとってもそのアイデンティティに関わる事柄であり、少しでも情報が残る今のうちに記録されるべきである。

参考文献

全国石材工業会（1965）大理石・テラゾ五十年の歩み。全国石材工業会。

矢橋大理石商店（1976）大理石花崗岩見本帳。矢橋大理石商店。

宮内庁内匠寮（1931～1933）朝香宮邸新築工事録。

国立科学博物館（2007）国立科学博物館本館改修工事報告書。国立科学博物館。